二

磐音は正月二日の昼過ぎ、両国橋を渡り、西広小路の西側、米沢町の角地に分銅看板を掲げる両替商の今津屋へ新年の挨拶に出向いた。

今津屋は三が日は休みだが、取引のある大名家、高家はたもとの留守居役やら御用人が挨拶に来る。そこで表戸は二枚ほど開けてあった。それに主を待つ乗り物が店前には待機し、供の者たちが玄関先に溢れていた。

武士を頂点とする身分制をとった江戸幕府とはいえ、すでに実権は商人階級がしっかりと握っていた。

江戸の金融の元締めともいえる今津屋には、有力大名や旗本衆が多額の借財をなしていた。そのため正月早々に重臣自ら商人に挨拶に来る羽目に陥っていたのだ。

磐音はにとって日々の暮らしを支えてくれる大事な今津屋だ。頼りにするという点では、大名家も磐音も一緒かもしれない。

店先で挨拶を済ませ、早々に暇しようと考えていたら、老分の由蔵に見送られて、西国筋の大名家の留守居役が微醺を帯びて姿を見せた。

磐音は一行が立ち去るのを、乗り物から離れた場所に下がって見ていた。

「老分どの、先ほども申したが、参勤下番の折りに頼むぞ」

と言い残した留守居役が乗り物に乗り込み、供を従えて米沢町を浅草御門へと向かって去って言った。

どうやら参勤交代に必要な入費を借りに来た様子だ。

「坂崎様、まあ、お入りなさい」

由蔵はちゃんと磐音のことを見ていたようだ。

「正月早々忙しそうですね。新年のご挨拶をしたらお暇する所存です」

「今ようやく一段落したところです。まあ、奥へ通ってくださいな。吉右衛門様も喜ばれましょう」

主の名を出されて戸口を潜った。

広い店先では接待の後片付けをおこんらが始めていた。

「新年明けましておめでとうございます。本年もよろしくお引き立てのほど、お願い申します」

磐音の挨拶に店の奉公人たちが慌てて応じた。

「坂崎さんは今津屋の親戚みたいなものよ。そう鯱ばって挨拶されては店の方々もかえって慌てるわ」

おこんが笑った。

「いや、親しき仲にも礼儀ありでござる」

「まあそう言わずに奥へお通りなさいな」

おこんに案内されたのは、庭に面した主の御用部屋だった。

「おや、坂崎様」

「今津屋どの、新年のご挨拶に罷り越しました。本年もどうぞよしなにお付き合いのほど、お願い申し上げます」

「こちらこそお願い申しますぞ」

吉右衛門は磊落に答えると、

「お酒はいかがでございますかな」

「大晦日以来、飲み続けにございます。お気持ちだけいただきます」

折りも折り、おこんが淹れ立ての宇治茶を運んできて。あとに続いて由蔵も入ってきた。

「奈緒様のことですが、なにか分かりましたか」

吉右衛門の問に、暮れの吉原で四郎兵衛から告げられた経緯を話した。三人は息を呑んで聞いていた。

「やはり吉原でしたか。丁子屋様の抱えとはなあ」

吉右衛門が呟き、思案するように沈黙した。

「坂崎さん、どうする気なの」

おこんが焦れたように言う。

「おこんさん、もやはそれがしの手には届かぬ花にござる」

「豊後関前から肥前長崎、豊前小倉、長門の赤間関、さらには京の島原から加賀金沢まで奈緒様を追って旅しておきながら、諦めるつもりなの」

「世の中には如何ともしがたきことがある。それがしにはもはやどうしようもござらぬ」

おこんがなにか言いかけたのを吉右衛門が手で制した。

「もし坂崎様に金子の都合がつけば、身請けなさる気は未だおありですか」

「いえ、それはございませぬ」

「なぜですかな」

「それがしに千両もの金子をお貸しくださる方があるとは思いませぬし、借財したとしても返す当てさえありません。ほかにあるとすれば押し込みをするなど、いずれ尋常のことではありますまい。それがしが奈緒どのを救いたい気持ちに変わりはありませんが、尋常ならざる手立てで金策し、身請けしたところで、奈緒どのが幸せになるとも思えませぬ」

吉右衛門は口を開きかけたが、途中でやめた。

磐音は年末年始、想い合う男と女、許嫁同士が離れていて添い遂げる途はないか考え続けてきた。その答えが、

『生涯、妻を娶らぬ』

ということだった。

遊里の外から奈緒の堅固を祈りつつ過ごす。その気持ちがいつの日か、奈緒にも通じるはずだ。そのような男と女がこの世の中にいても、またそのような夫婦のあり方があってもよいような気が磐音はしていた。

吉右衛門は磐音の心の内を察していた。

「想い合う男と女、二つ身を一つに重ねて互いの体に喜びを感じたいと思うものにございます。これは夫婦も一緒、まっとうな欲望にございます。別々の地に離れた男と女の情愛に耐えられますか」

たとえ千里離れていても想い合う心をだれも止めることはできまい。奈緒とならば、其れができるような気がした。だが、心中の思いを口にせず、ただ瞑目した。

磐音の想念に、奈緒が歌んだ四つの句が次々に浮かんだ。それは奈緒が売られた先の遊里に書き残していたものだ。

鴛鴦や　過ぎ去りし日に　なに想ふ

夏雲に　問うや男の　面影を

飛べ飛べや　古里のそら　秋茜

風に問ふ　わが夫は何処　実南天

これは奈緒から磐音に告げられた気持ちである。

応えるのは磐音だ。

「坂崎様ならではのご決断をなされたようだ」

吉右衛門が言い、

「もし気が変わられたならばお知らせください。この今津屋がお手伝いしましょうぞ」

吉右衛門は言外に身請けの金を用立てようと言っていた。

磐音は吉右衛門の気持ちに胸のうちで涙しながら静かにうなずいた。

「坂崎磐音って、つくづく馬鹿正直な男ね」

見送りに出たおこんが顔を横に振った。

「仕方ござらん、それがしの生き方です」

磐音はおこんに背を向けた。するとおこんが小さく、

「女はそんな男がたまらなく愛しいのよね」

と呟く。

磐音が黙って歩き出したとき、両国西広小路に、

「読売、読売だぞ！麹町一丁目の漆工芸商、加賀屋光輝様はじめ、家族から奉公人まで十五人が皆殺しだ！事件の経緯は読売を買って呼んでくんな」

と叫んだ読売屋に、往来する人が群がった。

おこんが、

「坂崎様、読売を買って。加賀屋様は今津屋の昵懇のお店なの！」

と叫んで店に飛び込んでいった。

磐音は人込みを掻き分けてようやく読売を一枚買うことができた。

今津屋に戻ると老分の由蔵が青い顔で店先に立っていた。

「加賀屋様が奇禍に見舞われたというのは間違いございませぬか」

磐音は読売を差出し、首肯した。

「なんとうことで」

ざっと黙読した由蔵が、

「坂崎様、この後、御用がございますか」

と訊いた。

「正月ことゆえ、格別行くところもござらぬが」

旦那様とご相談の上、まずは私が出向くことにになりそうです。ご一緒してくださいませんか」

「むろん、かまわぬ」

由蔵は頷くと奥に向かった。

麹町一丁目の、加賀金沢産の漆器工芸品などを注文で商う加賀屋の前には奉行所の手が入り、心配して押しかけた加賀屋の身内や知り合い、それに野次馬を小者たちが制止していた。

今津屋の老分由蔵に従ってきた磐音も、大勢の人の群れに混じり、店の様子を見ていた。

読売によれば、一家の惨殺に気付いたのは、野州の実家に父親の病気見舞いに戻っていた番頭の新造だという。

見舞いを済ませた新造が江戸に戻ったのが二日の早朝、事件を最初に知ることになる。腰を抜かしたまま通りまで這い出てきた新造の姿を通りすがりの年始客が見付け、番屋に注進した。

事件を担当したのは南奉行所だ。

急行してきた役人たちが見たものは、八代目の光照一家五人と、住み込みの奉公人九人が皆殺しに遭った陰惨な姿だった。

「こりゃ、近付けませんな」

由蔵が呟く。

道々聞いてきたところによると、今津屋と加賀屋の関わりは、先代以来、同じ師匠のもとでの謡の稽古がきっかけだったという。

「どけ、道を開けてくれ」

小者たちが野次馬を遠ざけようとした。遺体を搬出するのであろうか。

磐音と由蔵の前がふいに開いた。すると戸口に見知った人物が立っているのが見えた。

小柄な体に大頭。その大頭に陣笠をちょこんと載せた南町奉行所の年番方与力、笹塚孫一だ。

腰に大小を帯びた格好は、串刺しにされた豆腐田楽のようだ。風采は至って上がらぬ。だが、この大頭は、南町奉行所の鋭敏な頭脳そのものだった。

笹塚の視線がふいにながれて、磐音たちに止まった。

「おお、来ておったか」

ような呟きを洩らした笹塚は、手招きをした。

磐音と由蔵が加賀屋の戸口まで行くと、中からさちの臭いが漂った。

「笹塚様、加賀屋どののご一家は……」

「西広小路からでてきたということは、今津屋と知り合いか」

「はい、先代以来の付き合いにございます」

「ひどいものだ」

と吐き捨てた笹塚が、

「そうだ、そなた、傷を見てくれぬか」

と磐音に言い出した。

「押し込み強盗は複数、押し入ったのは除夜の鐘の後、正月元旦の未明のことだ」

江戸の商人たちは大晦日のぎりぎりまで商いに精を出す。だからどこも元旦は休みで、遅くまで寝ているところが多い。そんせいで二日のあ様で加賀屋の押し込みは発見されなかった。

「元旦の未明の押し込みですか。よくまあ、戸を開けたものですね」

「押し破った跡はなし、仲間の引き込みがいたとも思える。それも謎の一つだ。ともかく五、六人の手練れが一気に侵入し手早く仕事をしてのけた。大半が刀傷だが、一つ異なった傷がある。それを見てくれ」

磐音は由蔵の顔を見た。

由蔵が頷き、

「私は血を見るとくらくらします。ここでお待ちします」

と言った。

磐音が通用口を潜ると草履の裏がべっとりとねばついた。流れた血が生乾きのまま土間に広がっていた。その血は、店先で殺された三人の奉公人たちが流したものだ。

どれも一太刀で首筋を刎ね斬るか、新造を一突きして死に至らしめていた。笹塚の言うとおり、押し込みに入って慌ただしい最中、見事な腕の持ち主ばかりだ。そんな死体の間には、正月飾りや蒔絵の提げ重などが散らばり、さながら血の海の仲に浮かんでいるようだった。

「これは……」

さすがの磐音も絶句するほどの惨劇だ。

「奥を見てくれ」

笹塚は磐音を奥座敷に連れていった。

加賀屋はそのなのとおりに加賀金沢の出で、替えざわの工芸技術を江戸に持込、提げ重や茶弁当の調度を武家や豪商たち相手に商いをして、江戸でも屈指の工芸商の名をほしいままにしていた。

提げ重とは、重箱、酒瓶、杯、銘々皿、盆などを一つにして提げるようにした道具だ。金持ちの物見遊山、花見、船遊びには欠かせないものであった。

この小さな調度は、江戸の塗りの、蒔絵の、彫金の、指物の、漆工芸の技と粋が結集されて造り上げられるものだ。工夫と創意の調度は、何百両、時に千両を超えるものもあったという。

加賀屋はこの提げ重、茶弁当、矢立などを商っており、

として、格別の値がついているという。それだけに屋敷の造作も庭の造りも見事なものだった。

だが今は、一家、奉公人が流した血と死の臭いに包まれて、陰惨を極めた風景があちこちに展開されていた。

当代の加賀屋光照は、仏間で殺されていた。総金張りの大きな仏壇の奥に金蔵がが隠されていたらしく、光照は、横にずれた仏壇の後ろにぽっかりと開いた壁の穴の前で頽れていた。

「見てくれ、この刺し傷だ」

笹塚が、光照の鬢から顔を真横に突かれた傷を指した。傍らから、小者が提灯の明かりを差し出した。

「手槍ですか」

「とも思われるが、手槍にしては傷が小さくはないか」

傷の径はせいぜい二分とはない。

『細長く鋭利な刃物』

に磐音は思い当たらなかった。

光照が流した血は傷口が傷口だけに、さほどではなかった。が、主夫婦の寝間に集められ、斬り殺された光照の女房磯乃と娘二人に倅一人の流した血は、寝間をじっとりと濡らすほどの量だ。

隣の部屋の畳には血の足跡が無数に残っていた。

磐音は乱れた血の跡を眺めながら笹塚に訊いた。

「血の跡は押し込みの者たちのものにございますか」

「それがな、最初に飛び込んだ御用聞きや手先たちのものも混じっておるのだ」

磐音は小者から提灯を借りて畳の足跡を照らした。

気になったのは、石突きの跡のような、うっすらとした痕跡だ。それが足跡の横手にいくつか混じっていた。小者たちが持つ六尺棒にしては、小さすぎた。それに……

「何か不審か」

笹塚が訊く。

「押し込みの一人は、右足が不自由ではありませぬか」

「ほう、なぜじゃ」

磐音はいくつかの草履の血の跡を示した。

「右足は左に比べて踏みしめが弱うございます。それにこの石突きの跡を杖と考えますといかがですか」

笹塚孫一が磐音のかたわらにしゃがみ込んだ。すると大刀の鐺が畳に当たった。

「おもしろい。押し込みの一人が足を引きずっておるとはな」

「笹塚様、もしや杖に鋭利な錐のようなものを仕込んでおるとしたら」

「加賀屋の傷は、杖に仕込まれた細き手槍か」

「あくまで素人の推測いございます」

「なかなかどうして、そなたの考えは捨てがたい」

と笹塚がにたりと笑った。すると煙草の臭いが磐音を襲った。

「正月早々、南町は、二つも事件を抱え込んだ。それも二つともこの界隈で起こった事件だ。もっとも一つは寺社方が担当だが、どうもいま一つ解せぬこともあって、昨日見てきたところだ」

「寺に賽銭泥棒でも入りましたか」

「寄合三千石の高力主税の奥方、染野様が、市谷八幡の世俗茶木稲荷の桜の木で首吊りをなされた。染野様は眼病を患っていてな、茶木稲荷に茶断ちの願をかけておられたそうだ。

「病が思わしくないので首吊りをなされたのですか」

「とも思えんというのだ。高力家の用人どのが奉行所に参って、調べてくれとお奉行に申し出られた。というのも奉行と高力家とは知り合いでな。とおかく春先からえらい事件が二つも続きおった」

そう吐き捨てて立ち上がった笹塚は、

「そなた、当分、旅に出ることはあるまいか」

と訊いた。

「この押し込みのねぐらを探り当てたら、そなたに助勢を頼まねばならぬでな」

「笹塚様、それがし、南町奉行所の同心ではございませぬ」

「そう申すな。そなたとわしの仲ではないか。それに、至って気が合う」

と勝手なことを笹塚は言った。

「ともかく頼りにしておる」

「笹塚様、加賀屋どののご一家はどうなります」

「親戚やら通いの番頭らが死体の下げ渡しを願っておる。菩提寺の西念寺で通夜が行われることになろうな。加賀屋の暖簾をどうするかは、その後のことだな」

磐音は由蔵の待つ加賀屋の表に出た。